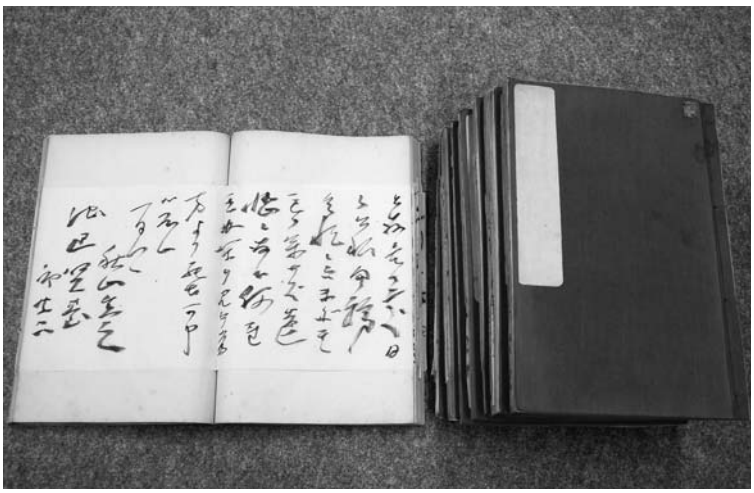
岩瀬文庫コレクション

書簡集（125―48）四冊（125―67イ）四冊

筆跡や文章にはその人の人柄や知性が表れると言います。歴史上の人物の書いた文字を見ることで、その人のドラマチックな生涯がより実在感を持って感じられることがあります。この『書簡集』八冊は、明治大正期の著名人の手紙206通を貼り集めたものです。夏目漱石、若山牧水、高橋是清、岡倉天心、新渡戸稲造など、幅広い分野の人物の名が並びます。



▶この資料は、4月2日からの企画展「自筆本は語る」で展示されます。ぜひご覧ください。
また、動画サイト「岩瀬文庫の世界」（岩瀬文庫HPからリンク）で同文庫の蔵書を紹介しています。

写真は、日露戦争で海軍参謀として連合艦隊を勝利に導いた秋山真之の手紙です（NHKドラマ『坂の上の雲』の主人公です）。「智謀湧くが如し」と明晰な頭脳を称えられた知将は、一方で豪快な性格だったといわれています。なるほど、この筆跡にも真之の大胆な人柄が表れているようです。宛名は池辺三山（東京朝日新聞主筆。対ロシア開戦を強く主張）で「お手紙拝読。帰京後に一度お会いしたいと思っておりますが、多忙でかないません。閑を見てこちらから参上します」とあります。丁寧ながら簡潔な文面からも真之の率直な人柄が伺えます。

この手紙が書かれた年は不明です。走り書きのような筆致から、真之と三山が手紙のやり取りに慣れた間柄と思われます。

シリーズ60 西尾の古を探る

三河一向一揆と吉良氏

戦国期、西三河の真宗は、野寺本證寺・佐々木上宮寺・針崎勝鬘寺の三河三カ寺や五カ寺と呼ばれる有力寺院を中心にその教線を三河の村々に伸ばし、強固な宗教的共同体を形成していました。一方、転戦による松平氏の戦費の増大は農民への課税を重くし、家康の土地支配は入り組んだ在地の領主の土地支配権を否定して小領主や名主層階級の武士を動揺させました。

永禄5（1562）年秋、三カ寺の持つ「守護不入権」である検断権と土地支配権の特権を侵されたことを理由に、守護不入の地での狼藉を許すことができないと、檀那や末寺・末山の百姓が一味して一揆が勃発しました。藤波畷の戦いで敗れ、岡山に引きこもっていた吉良義昭は、再び家を興そうとこの一揆方に味方し、家康方に寝返っていた荒川城主・荒川義広も参加しました。そして、本證寺には吉良荘内の地侍が参集しました。

永禄6年10月、西尾城の酒井正親が本證寺と荒川城を攻撃することで、この地域での戦いの火ぶたが切られ、松井忠次、松平甚太郎は吉良義昭を攻撃しました。永禄7年、一揆方は旗色が悪くなり、荒川城と東条城は最後の拠点となりました。両城に挟まれて孤立した西尾城は兵粮米が欠乏し、家康は刈谷の水野信元の助けを受けて、二千余人で西尾城へ兵粮米を搬入しました。その帰途、荒川城を攻めてこれを打ち破り、2月28日には東条城の義昭を攻撃しました。荒川義広は河内へ、吉良義昭は近江へ落ち、340年間にわたり吉良荘を治めてきた中世吉良氏は滅亡しましたが、その後、江戸時代に吉良氏は復興しました。